



高橋尚子
たかはし なおこ
ダイバーシティ駅伝47
応援団長

心のバリアフリーへ、タスキつなぐ ——2024年秋号砲!「ダイバーシティ駅伝47」

私はマラソンランナーとして、あるいは取材やイベント、スポーツ関係の役職などで競技に関わる立場として、人種や性別、宗教、障がいの有無も関係なくみんなが笑顔になれるのがスポーツの素晴らしところだという思いを強くしてきました。2024年11月に大分市で行われるプレイベントを皮切りに、2025年3月から8月にかけて、まさにそのことを体現するイベントである「ダイバーシティ駅伝47」が、全国をまたにかけて開かれます。

「ダイバーシティ駅伝47」は、走ることを通じ、誰もが生きやすい社会づくりを目指そうと企画されたもので、一般社団法人スポーツ・オブ・ハートが2012年から東京と大分で開催してきた「ノー

マライズ駅伝」がその原型です。全国47都道府県で開催され、多様なランナーで構成されるチームがタスキをつなぐ駅伝で、今年、2025年大阪・関西万博の機運醸成プログラムとして、同万博のアクションプログラムに盛り込まれました。なお、主催者のスポーツ・オブ・ハートは、パラリンピック選手の呼びかけで設立され、障がい者と健常者らをスポーツを通じて結びつける事業を展開している団体です。私も応援団長として関わり続けてきました。

駅伝のチームは、性別や年齢を問わず、健常者や車いすランナー、視覚障害者、その他の障害がある方、LGBTQの方など様々な人々で構成され、1本のタスキをチーム全員でつないで市街地などを周回します。チームにはアスリートやタレントも加わり、全ての都道府県で、キャラバン方式で開催します。

スポーツの中でも特に陸上競技は、多様な属性の人たちの間の壁をなくす有効な手段だと感じています。またマラソンは、安全性が確保できれば、それほど場所を選ばず、同時に同じコースを走ることもできる競技です。

さらに駅伝は、チーム競技の利点を併せ持ちます。レース前には初めて会った参加者らが自己紹介やかけ声などによって打ち解け合い、レース中は仲間が駆ける姿に声援を送り、一緒に喜び、悔しがる。そうした「かっこいい」「操縦できる車いす選手って、すごいね」と、変わります。わずか1時間ほどで彼らとの間の壁が取り払われ、ヒーローとして憧れる視線が変わっていくのを目の当たりにしました。

子どもたちが家に帰って両親にその体験を話すことによって、思考が凝り固まりがちな大人の心も動かします。子ども自身自分とは違う立場や状況の相手を尊重することを覚えて、根幹の部分から変わっていく、将来誰もが生きやすい社会の実現にもつながるはずです。

今の日本人に求められるのは、ハードとともに「ソフト面のバリアフリー」だと感じ



車いすランナー



伴走者と走るブラインドランナー

じます。以前、車いすの方から、「スロープのない階段で、『大丈夫ですか』と声をかけてくれるのは海外の方が多い」「階段にスロープがあることよりも、声をかけてもらえる方がうれしい」と言われました。急に大き



義足の小学生ランナー

ているうちに、いつの間にか人々の間の壁が取り払われていく姿を、私は何度も目にしてきました。

現役時代の私は、自分が強くなる、速くなることに集中していたので、見えている世界も競技が中心でした。だからこそ2000年シドニーオリンピックでの優勝や、世界記録更新を果たすことができたと言えるかもしれません。しかし引退後、様々なスポーツイベントに参加したり、JICAオフィシャルサポーターとして海外諸国を訪れたりする中で、当たり前だと思っていたことが当たり前ではなくなりました。それが覆されるのを感じました。

例えばアフリカでは、履く靴がない子どもたちや感染症で多くの人が命を落とす現状も変わるのは難しいかもしれませんが、このダイバーシティ駅伝が、ソフト面でのバリアフリー実現に向けた、小さくても確実な一歩になることを期待しています。

2025年の大阪・関西万博に多大な公費が投じられることについては様々な議論がありますが、ダイバーシティ駅伝はもとも、各自自治体の協力は得るものの、税金を極力使わないことを念頭に開催してきました。今回もその信条は変わりません。必要になるのは、このイベントの趣旨に賛同してくれるボランティアや地元住民の方々、企業の皆さんの支援です。

今、ほとんどの企業が障がい者雇用などを通じ共生社会の実現を推進してくれています。一方、それに伴うご苦労もあり、簡単に拡大できない実情もあると聞きます。それでも、ダイバーシティ駅伝のようなイベントに協力していただくことで地域が盛り上がり、住民の皆さんの障がい者への理解も深められ、それが、障がい者がさらに働きやすい社会につながると信じています。企業にとっても今まで見えなかった世界が見え、人脈が広がることになるでしょう。

2024年の秋から全国各地で繰り返されるレースは、私たちがこれから目指すべき社会の縮図とも言えます。一つひとつを皆さんの協力で成功させ、日本がバリアフリーの社会へさらに前進することを願っています。